ISSN 2760-8662

2025年度
緑の国際ボランティア研修

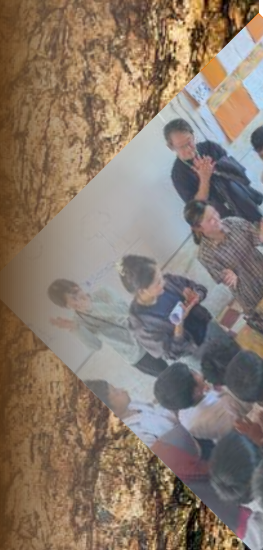
カンボジア国
2026年2月12日～2月19日





本研修は、国際緑化活動の重要性および
「緑の募金」の果たす役割についての理解を促進し、
将来の国際緑化協力人材を養成することを目的として
カンボジア国にて実施しました。









緑の募金

本研修は、公益社団法人 国土緑化推進機構が推進する
「緑の募金」を活用して実施しました。

目　次

「緑の国際ボランティア研修」を主催して i

研修の目的と本報告書について 1

研修員・実施団体員 2

研修の日程 3

研修地の概要と主要プログラムの実施結果 4

現地協力大学より 13

研修員による報告 15

外部評価者による所見 44

共催団体による評価と今後の展望 45

「2025 年度 緑の国際ボランティア研修」を主催して

公益社団法人 国土緑化推進機構
常務理事　今泉 裕治

2026 年 2 月 12 日(木)から 8 日間の日程で「2025 年度 緑の国際ボランティア研修」を開催し、無事に終了することができました。本研修を共催いただいた NPO 法人環境修復保全機構の三原理事長をはじめスタッフの皆様には、企画段階から研修員の募集・選考、訪問先等との連絡調整、研修員へのサポート、そして成果のとりまとめ(本報告書の編纂)に至るまできめ細かく対応いただいたことに対し、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。また、本研修を受け入れていただいたカンボジア王立農業大学の Dr. Borarin Bunthon 氏をはじめ同大学当局の皆様にも、多大なご理解・ご協力に感謝申し上げます。

特に、今回の研修では、当初訪問を予定していたシェムリアップ州がタイ・カンボジア二国間の武力衝突が起きた国境に近いということもあり、研修員の皆さんの安全を第一に考え、二国間の紛争の状況を見極めつつ、実施直前に行程を組みなおし、訪問地をトボンクムン州に変更したという経緯がありました。急な計画変更等のため研修内容には至らない点も多々あったかも知れませんが、とにかく皆さんが無事に研修を修了され、それぞれに得るものが大きかった様子であることに安堵しているところです。



本研修の財源となっている「緑の募金」は、第二次世界大戦前後に荒廃した国土に緑をよみがえらせるため 1950 年に開始された「緑の羽根募金」を前身とし、1995 年に「緑の募金法」が制定されたのを機に「緑の募金」へ改称するとともに、国内はもとより海外の森林の整備や緑化の推進にも活用させていただいています。

今回の研修にも、これまでと同様、日本の大学で多様な分野の専攻に属する学生 10 名とカンボジア王立農業大学の学生 3 名の計 13 名が参加し、ハードなスケジュールの中、カンボジアにおける産業や農山村の生活、森林保全の取組などについて見聞を深めるとともに、精力的にグループワークに取り組んでいただきました。本研修は、こうした幅広いプログラムを通じ、次代を担う若者たちに世界の森林や社会の現状を直に見聞し、異文化に触れ、考える貴重な機会を与えるものとなっていると自負しますが、このことは、「森づくり・人づくり」を通じて「人間が豊かな緑と水に恵まれた生活を維持できる」世界を目指すという「緑の募金法」の趣旨にも合致した大変意義深いことと考えます。

これまで「緑の募金」にご寄附をいただいた多くの日本の市民や企業等の皆様に、あらためて感謝申し上げますとともに、研修員の皆さんにも、「緑の募金」が今回の貴重な経験を可能にしてくれたことを忘れず、将来、就職して収入が得られるようになったら、皆さんの後輩たちが同じような貴重な経験の機会を得られるよう、募金へのご協力をよろしくお願いいたします。

研修員の皆様が、今回の経験を糧に、それぞれの分野や国・地域で大いに活躍され、これからの世界の持続可能な発展に貢献されることを心から祈念する次第です。





研修の目的と本報告書について

本研修は、カンボジア国における森林減少や環境劣化の深刻な状況を踏まえ、国際緑化活動の重要性および「緑の募金」が果たす役割についての理解を促進することを目的として実施しました。研修では、現地大学および NGO との連携のもと、植林活動地の視察、植栽作業への参加、小学校における環境教育活動、農山村地域での実地調査、地域住民との意見交換などを通じて、森林保全の取組や持続可能な地域づくりの実態について理解を深めました。また、現地の学生との協働活動や交流を通じて、国際協力における多様な価値観への理解を深めるとともに、実践的なコミュニケーション能力の向上を図りました。本冊子は、こうした研修の成果を広く発信し、国際緑化活動に対する社会的関心を高めるとともに、今後の事業実施に資する資料とすることを目的として作成したものです。

研修員・実施団体員

(1) 日本国から参加の研修員

No.	氏名		
1	橋本　一凛	HASHIMOTO Ichirin	東京農業大学　国際食料情報学部　1年
2	菱沼　美海	HISHINUMA Mimi	東京農業大学　生命科学部　1年
3	丸山　彩希	MARUYAMA Saki	獨協大学　経済学部　1年
4	向井　大歩	MUKAI Hiromu	東京農業大学　生物産業学部　1年
5	二宮　育己	NINOMIYA Ikumi	北海道大学　農学部　3年
6	大田　菜央	OTA Nao	東京農業大学　地域環境科学部　3年
7	佐藤　大寿	SATO Daiju	東京農工大学　農学部　1年
8	佐藤　颯星	SATO Ryusei	東京農業大学　農学部　2年
9	立野　美帆	TATENO Miho	北海道大学大学院　農学院　修士　1年
10	山本　薫奈	YAMAMOTO Kana	獨協大学　外国語学部　3年

(2) カンボジア国から参加の研修員

No.	氏名	所属・職階
1	NHEV Sreynich	カンボジア王立農業大学農業生物システム工学部　1年
2	NUON Soknea	カンボジア王立農業大学農業生物システム工学部　3年
3	PHOUNG Chomreoumnthea	カンボジア王立農業大学農業生物システム工学部　3年

(3) 主催団体: 公益社団法人 国土緑化推進機構(研修統括)

No.	氏名		所属
1	今泉 裕治*	IMAIZUMI Yuji	常務理事
2	箕輪 和香奈	MINOWA Wakana	募金業務部 課長

(4) 共催団体: 特定非営利活動法人 環境修復保全機構(事前研修・現地研修対応等)

No.	氏名		所属・職階
1	三原 真智人①	MIHARA Machito	理事長、PD / 東京農業大学 副学長、教授
2	河邊 久美子①	KAWABE Kumiko	理事(普及担当)、普及センター長、PD / カンボジア王立農業大学 客員教授
3	青木 景子①	AOKI Keiko	本部 普及センター 専門家、Asso. PM
4	ピェ ソン ソェ②	Pyae Sone Soe	本部 普及センター 事務室長、PC
5	白石 みき子③	SHIRAISHI Mikiko	本部 管理センター 事務室長、PC
6	上野 貴司②	UENO Takashi	本部 管理センター事務室 参事、PC
7	ローン ヴィリアム②	RORNG Viream	東南アジア事務局 カンボジア支局 職員、Asso. PC
8	ヴァー スレイレン②	VA Sreylen	東南アジア事務局 カンボジア支局 職員、Assi. PC

* カンボジア国における現地研修の随行者
①研修企画　②研修引率　③研修支援
PD: Program Director, PM: Program Manager, PC: Program Coordinator

研修の日程

(1) 説明会（対面）
日時：2025 年 12 月 18 日（木）18：00～19：30
場所：東京都千代田区平河町 2-7-4 砂防会館別館 A 棟 2 階蔵王会議室
内容：研修員の自己紹介、主催・共催団体紹介、緑の募金および研修趣旨　等

(2)-1 事前研修（オンライン）
日時：2026 年 1 月 16 日（金）18：30～20：30
場所：オンライン
内容：講義、グループワーク、渡航準備 等

(2)-2 事前研修（オンライン）
日時：2026 年 1 月 30 日（金）18：30～20：30
場所：オンライン
内容：活動計画の最終化等

(3) 現地研修
日程：2026 年 2 月 12 日～2 月 19 日（8 日間）
場所：カンボジア国プノンペン都、トボンクムン州

日		主なプログラム内容	宿泊地
1	2/12（木）	・成田国際空港第 1 ターミナルより出発（OZ 101 便 13:20 発） ・テチョ国際空港着（OZ 739 便 23:20 着）、現地集合※	プノンペン
2	2/13（金）	・トゥールスレン虐殺博物館訪問（希望者のみ（オプション）） ・カンボジア王立農業大学にて現地での研修開始式 （挨拶　学長 Prof. Dr. NGO Bunthan、センター長 Dr. BUNTONG Borarin） （樹木の計測と炭素貯留量の推定実習） ・キリングフィールド（チョンエク虐殺センター）訪問	プノンペン
3	2/14（土）	・Khmer Green Charcoal Co., Ltd.訪問 （有機廃棄物の再利用を目指した練炭の製造と販売） ・プノンペンからトボンクムン州に陸路移動 ・Techo Thipadei Rubber Heritage Park 訪問 （プランテーション農業の一例としてゴム農園を視察）	トボンクムン
4	2/15（日）	・Chitheang Lake および周辺農山村の視察 （農業、漁業や生物多様性保全、防災等に果たす湖の役割を視察） ・農山村聞き取り調査（グループテーマに基づいて） （森林保全、気候変動対策、生計活動（非木材林産物〔NTFPs〕を含む）、および生物多様性保全等のキーワードから）	トボンクムン
5	2/16（月）	・Sraesorm Thymey Primary School 訪問 （植林樹木の生存率調査と補植活動、グループごとに環境教育の実践） ・カンボジア農林水産省 トボンクムン州農林水産局訪問 （謝意表明、質疑応答、意見交換） ・ヘン・サムリン・トボンクムン大学（UHST）訪問 （トボンクムン州内の地方国立大学における研究・教育の視察）	トボンクムン
6	2/17（火）	・トボンクムン州からプノンペンに陸路移動 ・プノンペンの宿舎付近でグループ活動 （活動の振り返りと翌日の研修成果発表会に向けた準備）	プノンペン
7	2/18（水）	・カンボジア王立農業大学に陸路移動（研修成果発表会、研修振り返り、研修修了式）、セントラルマーケット訪問	プノンペン
8	2/19（木）	・テチョ国際空港にて現地解散・テチョ国際空港発（OZ 740 便 00:30 発） ・成田国際空港着（OZ 102 便 11:20 着）	機内泊



研修地の概要と主要プログラムの実施結果



(1) カンボジア国の概要

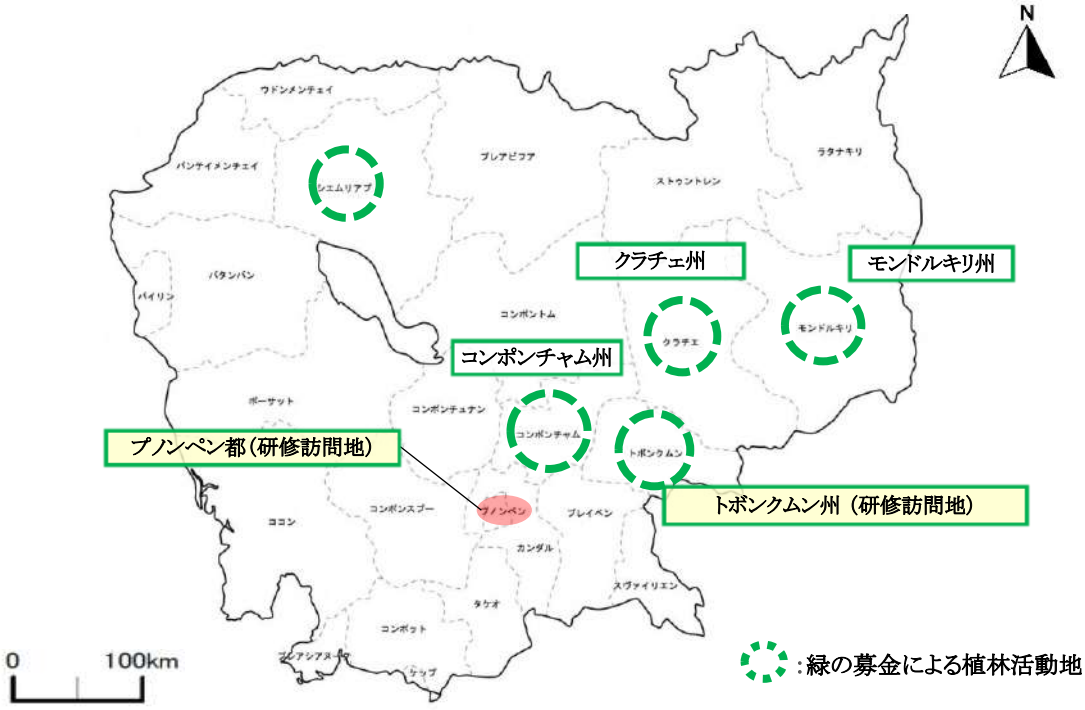
カンボジア国は、東南アジアのインドシナ半島南部に位置し、タイ、ラオス、ベトナムと国境を接しています。国土面積は約 18 万平方キロメートル、人口は約 1,700 万人（2025 年時点）で、首都はプノンペンです。国民の多くはクメール人で、仏教が主要な宗教として広く信仰されています。

豊かな自然環境と文化遺産を有するカンボジアは、アンコール遺跡群に代表される歴史的遺産とともに、多様な森林生態系にも恵まれています。しかし近年、経済成長に伴う土地開発や違法伐採などにより森林面積の減少が深刻化しており、政府は 2030 年までに国土の 60%以上を森林で覆うという目標を掲げ、保全・再生の取組を強化しています。また、地域住民による持続可能な森林資源の利用と管理を推進する「コミュニティ林業」も拡大しつつあり、国際協力のもとで森林保全活動が進められています。

(2) 研修先の概要と実施結果

①「緑の募金」植林地

国土緑化推進機構の「緑の募金」による助成を受け、環境修復保全機構は 2011 年からカンボジア国において森林再生に取り組んでいます。現地の寺院や学校などの共有地を主な対象として、地域住民と協働しての植林、森林保全および生物多様性の重要性に関するワークショップ等を、これまでに 6 州で実施してきました。本研修では、2025 年度に植林を実施したトボンクムン州の Sraesorm Thymey Primary School に訪問し、児童や現地の学生と協働して、補植活動を含む植林地管理活動を実施しました。さらに、研修員が自ら企画した環境教育ワークショップを児童を対象に実施しました。



カンボジア国において緑の募金により実施している植林活動地と本研修における訪問地



「緑の募金」事業地における補植活動



環境教育の実践

② カンボジア王立農業大学

カンボジア王立農業大学は、1964 年に設立された、カンボジアを代表する農業系高等教育機関であり、農林水産省の所管下にあります。農学部（Faculty of Agronomy）、畜産学部（Faculty of Animal Science）、獣医学部（Faculty of Veterinary Medicine）、森林学部（Faculty of Forestry）、水産・養殖学部（Faculty of Fisheries and Aquaculture）、農業生物システム工学部（Faculty of Agricultural Biosystems Engineering）、農業経済・農村開発学部（Faculty of Agricultural Economics and Rural Development）、農産学部（Faculty of Agro-Industry）などの 10 学部と、農業職業教育訓練校（School of Agricultural Vocational Education and Training）で構成されています。

現地研修初日、同大学において、緑の国際ボランティア研修の現地研修開始式が開催されました。学長の Prof. Dr. NGO Bunthan、Dr. BUNTONG Borarin、国土緑化推進機構の今泉裕治常務理事、環境修復保全機構の三原真智人理事長をはじめ、研修員および関係者が出席しました。式では、Dr. BUNTONG Borarin から、大学の概要ならびにカンボジアの農業・林業の現状について説明がありました。その後、研修員がグループごとに研修テーマと仮説を発表し、意見交換を行いました。さらに、キャンパス内において樹木の炭素貯留量を推定する実習を行い、樹木の計測方法や森林資源評価の基礎を学びました。最終日には研修成果発表会が開催され、“Forest Conservation for Sustainable Development in Cambodia: Through Capacity Building and Framework Development for Local Communities”をメインテーマとして、研修の総括、仮説の検証結果、持続可能な森林管理の在り方について発表しました。発表後には、さまざまな観点から議論が交わされ、持続可能な森林管理の重要性について理解を深めました。



現地研修開始式



樹木の計測と炭素貯留量の推定実習

③トゥールスレン虐殺博物館とキリングフィールド

カンボジアの首都プノンペンにあるトゥールスレン虐殺博物館は、クメール・ルージュ政権下（1975～1979 年）に、かつて高校であった施設が収容・拷問施設として使用された歴史を伝える重要な場所です。現在は博物館として保存され、当時の状況や犠牲者の記録が展示されています。研修員は、個々の犠牲者の苦しみや人権侵害の具体的事例を学び、人権尊重と平和の重要性について考える機会を得ました。さらに、キリングフィールドと併せて訪問することで、大量虐殺の現実を歴史的に捉え、カンボジアの歴史を多面的に理解しました。

キリングフィールド（チョンエク虐殺センター）は、クメール・ルージュ政権期に多数の人々が処刑された場所として知られています。プノンペン郊外に位置し、敷地内には慰霊塔が建てられ、その内部には約 5,000 体の頭蓋骨が安置されています。研修員は現地を訪れることで、記録や展示だけでは捉えきれない虐殺の実態と、歴史が残した深い傷跡を実感しました。また、過去の出来事が現在の社会構造や開発課題にも影響を及ぼしていることを理解し、カンボジアが抱える課題を歴史的背景とともに考える視点を養いました。悲劇を乗り越え、社会再建に取り組んできた人々の歩みに触れることで、平和の維持と人権尊重の重要性を改めて認識する学習機会となりました。



トゥールスレン虐殺博物館訪問


キリングフィールド（チョンエク虐殺センター）訪問

④ Khmer Green Charcoal Co., Ltd.

ココナッツ殻などの農業廃棄物を原料とする炭燃料「エコブリケット」を製造・販売する Khmer Green Charcoal Co., Ltd.を訪問しました。


Khmer Green Charcoal 訪問


Khmer Green Charcoal からのインタビュー

同社は、木材を使用しないエコブリケットを提供することで、薪や従来型木炭への依存を減らし、森林伐採の抑制に貢献しています。また、エコブリケットは燃焼効率が高く、煙の発生が少ないため、家庭や地域の大気環境の改善にも寄与しています。さらに、未利用の農業廃棄物を原料として活用することで、廃棄物の削減と資源循環を実現しています。また、環境修復保全機構と連携し、廃棄されるキャッサバの茎を原料とするキャッサバ練炭の開発にも取り組んでいます。こうした活動は、地域住民の環境意識を高め、自然資源を主体的に保全・活用する仕組みづくりにも寄与しています。生産管理マネージャーの VONG Narith 氏の案内のもと、製造工程を見学し、環境・経済・社会の調和を目指す同社の取組について理解を深めました。

⑤ Techo Thipadei Rubber Heritage Park（テチョ・ティパデイ・ラバー・ヘリテージパーク）

持続可能な森林資源の利用と土地利用の実態を学ぶため、トボンクムン州の Techo Thipadei Rubber Heritage Park を訪問しました。同パークは 2024 年 12 月に設立され、フランス植民地期に植えられた樹齢約 100 年のゴムノキを含む、歴史的価値を有する樹木を保存する教育・文化施設として位置付けられています。カンボジア政府がこの地を公園として保全する背景には、ゴム栽培の歴史を後世に伝えるとともに、プランテーションの管理や土地利用について学ぶ研究・教育の拠点として活用する目的があります。本研修では、自然林だけでなく、経済活動の場として利用される樹林地にも目を向け、森林資源の利用、地域住民の生計、土地管理がどのように結び付いているのかを理解するため、同パークを訪問しました。現地では、樹木資源の計画的な利用、植栽地の管理、生産活動と地域社会との関わりについて学びました。具体的には、カンボジア農林水産省トボンクムン州農林水産局の YEUM Sokong 氏から、ゴム導入の歴史、産業の発展、従来の実生栽培からクローン技術への移行、現在の生産システムについて説明を受けました。研修員は、ゴム産業の歴史的・社会経済的意義に加え、プランテーションの管理方法や樹木資源の利用、地域社会との関わりについて理解を深めました。




Techo Thipadei Rubber Heritage Park 訪問

⑥ Chitheang Lake

湿地生態系の機能、生物多様性、周辺森林、地域住民の生計との関係を理解するため、トボンクムン州の Chitheang Lake（約 20 ヘクタール）において現地視察を実施しました。同湖は、雨期と乾期によって水位や水域面積が大きく変化する淡水湖であり、周辺地域から流入する水が湖の水質や生態系に大きな影響を及ぼしていると考えられます。地域では森林減少や土

地利用の変化が進んでおり、湖への流入水量や水質、生態系、生物多様性への影響が懸念されています。このため本訪問では、周辺地域と湖との水循環上のつながりを踏まえ、土地利用と水環境の変化が湖の生態系や地域住民の生活に及ぼす影響について理解を深めることを目的としました。

この湖は、漁業資源や水生生物の生息地として重要な淡水生態系であり、湖岸には草本、低木、水生植物（ハス〔*Nelumbo nucifera*〕など）が分布し、魚類、両生類、湿地性鳥類の生息環境を形成しています。また、湿地生態系は、水質浄化、生物多様性の維持、洪水緩和、地域住民の生計支援など、多様な機能を有しています。地域住民は、主に小規模漁業や自然資源の利用を通じて湖に依存しています。本観察を通じて、周辺森林による水源涵養、湖が提供する生態系サービス、地域住民の生計が相互に密接に結び付いていることを理解し、森林・湿地環境の一体的な保全と持続可能な資源利用の重要性を再確認しました。




Chitheang Lake の視察

⑦ Chitheang Village

環境保全に対する地域住民の認識と実践を把握するため、Chitheang Lake に隣接する Chitheang Village で現地調査を行いました。Chitheang Lake とその周辺の湿地・森林生態系は、地域住民の生活用水の供給源であるとともに、自給的な漁業や農業を支える重要な自然資源です。地域住民の生計は、ゴム、カシューナッツ、マンゴー、稲作、小規模漁業などに支えられており、自然資源と密接に結び付いています。一方で、近年は森林伐採の進行、水質の低下などが課題となっており、自然資源の持続可能な利用と保全の両立が求められています。

研修員は 3 グループに分かれ、それぞれの目的に応じた調査を行いました。調査では、参加型手法であるフォーカス・グループ・ディスカッション（FGD）と半構造化インタビューを併用しました。FGD は、住民の共通認識や社会的規範を把握するのに適しており、半構造化インタビューは、個人の行動やその背景を掘り下げるのに適しています。両者を組み合わせることで、環境意識や行動が形成される過程を多面的に把握することを試みました。グループ A（橋本 一凛、二宮 育己、大田 菜央、佐藤 大寿、NUON Soknea）は、住民 16 名への聞き取り調査と FGD における順位付けを通じて、森林が薪、建材、果実などを得るための重要な生活資源として認識されていることを示しました。グループ B（丸山 彩希、向井 大歩、立野 美帆、NHEV Sreynich）は、住民 8 名への聞き取り調査を通じて、森林の多面的機能に関する知識があっても、必ずし

も実際の行動には結び付いていないというギャップを確認しました。グループ C（菱沼 美海、佐藤 颯星、山本 薫奈、PHOUNG Chomreoumnthea）は、住民 13 名への聞き取り調査を通じて、ごみの分別行動が、個人の知識だけでなく、地域の慣習や周囲の人々の行動といったコミュニティ規範に強く影響されることを明らかにしました。これらの結果から、住民の環境意識と行動は、森林や環境に関する知識と、地域の慣習や社会的期待などのコミュニティ規範との相互作用によって形成されることが示唆されました。知識があっても、それを支える規範や仕組みが伴わなければ行動は変わりにくい一方、適切な規範や仕組みが整えば、知識が行動へと結び付きやすくなる可能性が確認されました。

本調査を通じて、研修員は、湿地・森林資源と農山村の生計との関係、ならびに環境保全行動が社会的な文脈の中で形成される過程について理解を深め、持続可能な資源利用に向けた取組の重要性を再認識しました。



Chitheang Village の視察



Chitheang Village における聞き取り調査

⑧ Sraesorm Thymey Primary School

トボンクムン州メモット郡の Sraesorm Thymey Primary School において、「緑の募金」植林事業地の管理活動として補植を行うとともに、研修員による環境教育活動を実施しました。この植林地は、国土緑化推進機構の「緑の募金」による助成を受け、環境修復保全機構がトボンクムン州で進めてきた植林事業の一環として、荒廃地の緑化、水源涵養、土壌保全を目的に整備されたものです。環境修復保全機構では、学校を拠点とした環境教育を重視し、児童が森林の価値を理解できるよう、植林地を教育資源としても活用してきました。





「緑の募金」事業地における補植活動（Srae Sorm Thmey Primary School）

補植活動の後、研修員は 3 グループに分かれ、小学生を対象に環境教育を行いました。グループ A は 6 年生を対象に、森林が洪水や土砂災害の防止、水分の保持に果たす役割、生態系のつながりについて授業を行い、さまざまな種類の葉を集めるゲームを通じて、森林の多様性を学んでもらいました。グループ B は 4 年生を対象に、ごみの分別とポイ捨ての問題について授業を行い、日常生活における行動の見直しを促しました。グループ C は 5 年生を対象に、燃やすごみ、リサイクル、リユースの分類ゲームを行い、廃棄物管理の基礎を体験的に学んでもらいました。これらの活動を通じて、研修員と児童は、植林地の管理と環境教育を組み合わせることの重要性を学び、地域に根差した環境保全への意識を高めることができました。




環境教育の実践（Srae Sorm Thmey Primary School）

⑨ カンボジア農林水産省トボンクムン州農林水産局

研修員は、カンボジア農林水産省トボンクムン州農林水産局を訪問しました。同局は、州内の農業振興、森林管理、水産業の振興、農山村住民の生計向上などを担う行政機関です。本訪問は、地域の農業行政や自然資源管理の仕組みを理解し、緑の国際ボランティア研修のテーマに関連する意見交換を行うことを目的として実施しました。訪問時には、農家への支援、農業協同組合の育成、森林保全、環境管理など、同局が取り組む主要な活動について丁寧な説明を受けました。また、同局と環境修復保全機構がこれまで協働で実施してきた環境教育や植林活動などの取組についても紹介されました。その後、研修員はグループごとに質問や意見交換を行い、地方行政が果たす役割、地域資源管理の実際、行政機関と NPO などが連携することの重要性について理解を深めました。




カンボジア農林水産省トボンクムン州農林水産局訪問

⑩ ヘン・サムリン・トボンクムン大学

研修員は、トボンクムン州のヘン・サムリン・トボンクムン大学を訪問し、地域開発と人材育成において高等教育機関が果たす役割について学びました。同大学は 2016 年に設立され、科学技術、農業、ビジネスなどの分野を中心に、教育・研究・地域貢献に取り組んでいます。農学部、経営・起業学部、文学・人文学部、外国語研究所、情報技術研究所、技術・職業訓練研究所などが設置され、職業訓練課程から学士課程まで幅広い教育を提供しています。訪問当日は、農学部副学部長の SROIN Chanthear 氏の案内のもと、農業実習圃場や研究試験区を見学しました。研修員は、作物栽培の実習内容、農業生産に関する実習施設、大学の研究活動について説明を受け、同大学が地域農業の発展に果たす役割への理解を深めました。

また、同大学と環境修復保全機構は、MOU（協力覚書）に基づき、農業教育、研究能力の向上、地域環境活動などの分野で連携しています。同大学が農場や研究施設を提供し、環境修復保全機構が研修、環境教育、持続可能な農業に関する技術支援を行うことで、双方の教育・研究活動の強化を図っています。

今回の訪問を通じて、研修員は同大学の教育・研究・地域貢献の取組を理解し、農業分野において大学が果たす役割の重要性を学びました。





ヘン・サムリン トボンクムン大学訪問

参考資料

(1) FAO & Convention on Wetlands. (2025). Agriculture and wetlands: Maintaining and restoring wetlands for sustainable food production and ecosystem health (Technical Report 13). Food and Agriculture Organization of the United Nations. https://openknowledge.fao.org/handle/20.500.14283/cd6188en

(2) Tboung Khmum Provincial Department of Agriculture, Forestry, and Fisheries. (2026). Activity report of Tboung Khmum Provincial Department of Agriculture, Forestry, and Fisheries. Facebook. https://www.facebook.com/share/1GGWSAeLrZ/

(3) The Phnom Penh Post. (2024, December 17). Tina opens new rubber heritage park. The Phnom Penh Post. https://www.phnompenhpost.com/national/tina-opens-new-rubber-heritage-park

現地協力大学より

Dr. BUNTONG Borarin
Director, the Division of Research and Innovation (DRI)
Royal University of Agriculture (RUA), Cambodia

It is a great pleasure and honor to contribute this message to the commemorative booklet for the International Green Volunteer Training (IGVT) Cambodia 2025.

On behalf of the Royal University of Agriculture (RUA), Cambodia, I would like to express my sincere appreciation to ERECON, NALAPO, Tokyo University of Agriculture, and all partner organizations whose dedication and support made this meaningful program possible. It was our privilege to support the implementation of the training in Cambodia and to welcome the participants to our country.

What impressed me most during the program was the trainees' enthusiasm, curiosity, and open-mindedness. Through field visits, environmental activities, and interactions with local communities, the participants had opportunities to learn beyond the classroom and to gain a deeper understanding of environmental conservation, sustainable development, and the relationship between people and nature. Such experiences offer valuable lessons that cannot be obtained from textbooks alone.

I was particularly pleased to witness the exchange of knowledge and experience among Japanese trainees, Cambodian students, researchers, and community members. These interactions promoted mutual understanding, cultural appreciation, and friendship, while encouraging participants to reflect on the environmental challenges and opportunities facing our societies. I believe that these people-to-people connections are among the most valuable outcomes of the program.

The final presentations demonstrated not only the knowledge gained during the training, but also the participants' thoughtful reflections and commitment to contributing to a more sustainable future. Their passion and willingness to learn gave me confidence that the next generation will continue to play an important role in addressing environmental and social challenges.

Beyond the technical knowledge and field experience gained, I believe that the greatest achievement of IGVT Cambodia 2025 was the spirit of cooperation and friendship developed among all participants. These relationships will help strengthen collaboration between Cambodia and Japan and contribute to future partnerships in education, environmental conservation, and sustainable rural development.

I sincerely congratulate all organizers, partners, and participants on the successful implementation of IGVT Cambodia 2025, and I look forward to our continued collaboration in the years ahead.

（内容の和訳）

このたび、緑の国際ボランティア研修記念冊子に寄稿する機会をいただきましたことを、大変光栄に存じます。

カンボジア王立農業大学（RUA）を代表し、本研修の実施にご尽力いただいた環境修復保全機構（ERECON）、国土緑化推進機構（NALAPO）、東京農業大学、ならびにすべての関係機関の皆様に心より感謝申し上げます。カンボジアにおける研修の実施を支援し、研修員の皆様をお迎えできたことは、私どもにとって大きな喜びでした。

本研修を通じて最も印象的であったのは、研修員の皆さんの熱意、探究心、そして柔軟な姿勢です。フィールド視察、環境活動、地域住民との交流を通じて、研修員は教室を越えた学びを得るとともに、環境保全、持続可能な開発、人と自然との関わりについて理解を深めました。こうした経験は、教科書だけでは得られない貴重な学びをもたらすものです。

また、日本の研修員、カンボジアの学生、研究者、地域住民が互いに知識や経験を共有する姿を見ることができ、うれしく思いました。これらの交流は、相互理解、文化への理解、友情を育むとともに、両国の社会が直面する環境課題と将来の可能性について考える貴重な機会となりました。人と人とのつながりこそ、本研修の最も重要な成果の一つであると確信しています。

研修成果発表では、研修を通じて得た知識だけでなく、研修員の深い考察と、より持続可能な未来に貢献しようとする強い意志が示されました。研修員の情熱と学びに向き合う姿勢から、次世代が環境・社会課題の解決において重要な役割を果たしていくことへの確信を得ました。

技術的な知識やフィールドでの経験に加え、緑の国際ボランティア研修の最大の成果は、参加者の間に育まれた協力と友情の精神であると考えています。これらの関係は、カンボジアと日本の協力をさらに強化し、教育、環境保全、持続可能な農村開発における将来の連携へとつながっていくことでしょう。

緑の国際ボランティア研修の成功にご尽力くださったすべての主催者、関係者、研修員の皆様に、心より敬意と感謝を申し上げます。今後も連携が継続し、さらに発展していくことを心より願っています。



研修成果発表会



研修員による報告

2025 年度 緑の国際ボランティア研修（カンボジア国）

~ International Green Volunteer Training in Cambodia, February 2026 ~



充実度 120%のカンボジア滞在



橋本 一凛
東京農業大学 国際食料情報学部 1 年

7 日間の記録

真冬の東京を出発して約 10 時間後、テチョ国際空港の外に出た途端、アジア特有の湿気を帯びた空気を感じました。それが、私にとってのカンボジア研修の始まりでした。そこから始まった怒濤の 1 週間は、瞬く間に過ぎていきました。

当初、私はスリランカの NPO キャンプへの参加を考えていました。しかし、このカンボジア研修を知り、費用も比較的手頃だったことから、「こちらの方が良いかもしれない」という軽い気持ちで申し込みました。きっかけは些細なものでしたが、1 週間という短い期間の中で多くの人と出会い、新たな経験を積むことができました。

この研修における私の個人目標は、「周囲に流されず、自分に必要なものを得る」ことでした。渡航 1 か月前、参加メンバーの情報を知り、オンライン事前研修で皆の流暢な英語を耳にしたことで、研修全体のレベルの高さに正直なところ萎縮しました。1 か月で英語を身に付けようと試みましたが、当然ながら、短期間でネイティブのように話せるようになるわけではありません。そこで、他人と比べるのではなく、英語以外の場面でも積極的にアイデアを出し、現地で得られる学びに集中しようと考えました。

カンボジアの現地研修では、すべての活動から多くを学びました。中でも特に印象に残ったのは、農山村への訪問と現地の人々との交流です。また、3 日目に訪れた Techo Thipadei Rubber Heritage Park も、強く心に残りました。

同パークは、周囲に建物がほとんどなく、広大なゴム農園が広がる別世界のような場所でした。バスから降りると、見渡す限りゴムノキが規則正しく等間隔に植えられており、その壮観な景色に深く感動しました。「プランテーション」という言葉は中学校の地理の授業で何度も耳にしていましたが、実際にその場を訪れることで、改めて多くのことを考えさせられました。

ゴムノキは、植栽後 6～7 年でラテックスを採取できるようになります。樹皮に切り込みを入れるタッピングによって流れ出る樹液を、3 日に 1 回程度、深夜から明け方にかけて採取するとのことでした。気温が低く、直射日光の少ない時間帯は乾燥や凝固が遅いため、より多くの収量が見込めるそうです。採取されたラテックスは、タイヤをはじめとするさまざまな製品の原料となります。

樹齢 24～25 年になるとラテックスの収量が減少するため、ゴムノキは伐採され、1 ヘクタール当たり 3,000～7,000 米ドル程度で木材として出荷されるとのことでした。ラテックスの採取を終えた後も木材として活用できる点では、資源を有効に利用していると考えられます。一方、自然林を伐採してプランテーションを造成するのであれば、環境に優しいとは言い難いです。しかし、ゴム栽培が小規模

農家の生活を支える重要な収入源であることも確かであり、環境への配慮と生産を両立させることの難しさを感じました。

なお、この地域は、靴が赤く染まるほど濃いれんが色の土壌に覆われていました。ラテライトと考えられるこの土壌は水はけが良く、ゴムノキの栽培に適しているとのことでした。

続いて、本研修の中心的な活動である農山村調査と、小学校での環境教育について述べます。いずれも、通常の観光では訪れることが難しい場所で実施されました。

私たちグループ A は、農山村調査と環境教育を二つの柱とし、“How do Cambodian people perceive forests as important assets?”というテーマを掲げました。農山村調査では、「森林保全」「教育」「公共施設の整備」「所得」など 10 項目を用意し、村人に重要度の高い順に順位を付けてもらいました。その結果、「森林保全」は予想以上に高く評価されていました。

一方、森林を大切だと考える理由としては、「日陰をつくる」「動物のすみかになる」といった回答が多く、森林が炭素循環などに果たす役割を挙げる回答は見られませんでした。このことから、森林の重要性は認識されていても、その多面的な機能については、十分に共有されていない可能性があると感じました。

小学校での環境教育では、「木の大切さ」「植生の有無による土壌の保水性の違い」「生態系のつながり」について授業を行いました。授業後には、校庭でチーム対抗の落ち葉集めを行い、どのような種類の葉があるかを皆で観察しました。児童は非常に興味を示してくれましたが、授業内容がどの程度理解され、伝わったのかを十分に確認することはできませんでした。また、環境教育の内容そのもの以上に、初めて会う学生と一緒に活動することへの関心が強く表れていたようにも感じました。

それでも、農山村の大人や子どもたちが、決して裕福とはいえない生活の中で、いつも笑顔で親しみをもって私たちを受け入れてくれたことは、忘れることができません。小学校の子どもたちも非常に人懐っこく、心から楽しんで授業を受けてくれました。正直なところ、そのことがとてもうれしかったです。彼らの笑顔は、これからも忘れないと思います。本音を言えば、その笑顔こそが何よりも大切なもののように感じました。あの笑顔が失われないために、私たちにできることに取り組みたいです。

その第一歩として、これからもさまざまな国を訪れ、世界をもっと知りたいです。将来は、農業の視点から国際的な場で活躍したいという、まだ漠然とした目標があります。だからこそ、多くの人と出会い、別れ、実際に自分の目で見て体験する中で、自分が取り組むべきことを見定めたいと考えています。

この研修における目標であった「周囲に流されず、自分に必要なものを得る」は、おおむね達成できたと思います。ここには書ききれないほど多くのことを、現地の人々はもちろん、先輩方の姿勢、運営に携わった方々、そしてほかの研修員から学び、多くの刺激を受けました。専門分野や背景の異なる人々と出会い、共に過ごすことで、自分にはない知識を得るとともに、自分に足りない点にも気付き、成長するきっかけを得ました。

ただし、この研修はあくまできっかけであり、7 日間の滞在だけで自分に劇的な変化が起きたわけではありません。今後は、この研修で得たものを一時的な経験にとどめず、自分の専門分野や将来につなげていきたいです。

最後に、本研修に携わったすべての方々、「緑の募金」を通じてご支援くださった皆様、そしてニノさん、菜央さん、大寿をはじめとするメンバーに、深く感謝申し上げます。本当に楽しかったです。

これから研修に参加する皆さんへ

カンボジアはとても魅力的な国であり、人々は皆親切です。旅程はあらかじめ決められていますが、訪れたい場所がある場合には、遠慮せずに相談してみることも大切です。今回は、そのおかげでナイトマーケットとモーニングマーケットを訪れることができました。

食事は東南アジアらしく、日本とは大きく異なります。見慣れない食材が使われていたり、非常に辛そうに見えたりする料理でも、体調に留意しながら、一度は味わってみることを勧めたいです。ただし、食べ過ぎると体調を崩すこともあるため、注意が必要です。

また、日程は非常に密度が高いため、体調管理が重要です。5 時間のバス移動は、時にジェットコースターのように感じられます。最終発表の前日は、本当に時間がありません。それでも、研修の充実度は 120%です。

Message to My Buddy

First, although we were both communicating in a second language, thank you for always trying to understand what I wanted to say and for explaining things to people in Khmer. Without you, we would not have been able to understand the villagers' views. I was also very happy when you and Thea offered me fruit, grilled bananas, snacks, plants, and local dishes and encouraged me to try them. Nick, I will treasure the yellow flowers you gave me. Thank you!





村の子供たちと



ナイトマーケット散策



モーニングマーケット散策

問い直した将来と環境観



菱沼 美海
東京農業大学 生命科学部 1 年

はじめに

研修に参加する前、日本にいた私は、カンボジアの人々はごみを分別せず、化学肥料を大量に使用するなど、環境への負荷が大きい生活を送っているのではないかと考えていました。しかし、実際の生活には環境への配慮が十分とはいえない側面がある一方、私たち自身の生活がいかに環境へ負荷をかけているかを強く実感させられる場面も多かったです。私たちのグループは当初、農業廃棄物に着目して農山村調査を行う予定でした。しかし、今回の調査地域では化学肥料がほとんど使用されておらず、化学物質による環境汚染も比較的少ない状況でした。そのため、当初想定したテーマと現地の実情との間にずれが生じ、最終的には家庭ごみの処理方法を調査することになりました。

研修を通して得たもの

本研修は、私自身の生活を見直す大きなきっかけとなりました。日本では、地域によってプラスチックと可燃ごみを分別する場合もあれば、同じ区分で収集する場合もあります。私は後者の地域に住んでおり、生活の中で生じるプラスチックごみと可燃ごみは同様に焼却処理されています。一方、トボンクムン州の調査地域では、多くの家庭でプラスチックなどの無機物と有機物が分けられていました。さらに、有機物は堆肥や家畜の餌として再利用され、循環的な資源利用が実践されていました。日本の方が制度やシステムが整い、環境への配慮が進んでいると考えていましたが、必ずしもそうとは言い切れない現実を目の当たりにしました。現地での生活を実際に見る中で、私は葛藤も感じました。研修前には「現地の人々のための農山村調査である」と説明を受け、私たちが何らかの形で地域に貢献するのだと考えていました。しかし実際には、彼らの生活を外部から一方的に変える必要があるとは限らず、むしろ私たちの方が多くを学んでいたと実感しました。現地の実情を見たとき、彼らの生活様式を無理に変えるのではなく、私たちの生活に取り入れられる工夫も多いのではないかと考えました。例えば、有機物を家畜の餌や堆肥として再利用する循環的な暮らしは、私たちの社会でも改めて見直す価値があります。「支援する側」として訪れたはずの私たちが、結果として多くを与えられる立場でもあったことに気付かされました。

この経験は、国際協力やボランティアの在り方について改めて考えさせられる契機となりました。

カンボジアの歴史が残す影

環境問題とは直接関係しない部分でも、強く心に残ったことがあります。私は半年前にもカンボジアを訪れ、現地の学校で活動した経験があります。私はショートヘアですが、小さな子どもから「ボーイ？」と困った表情で尋ねられ、高校生からも「なぜ髪が短いのか」と質問されたことがありました。カンボ

ジアでは髪が長いほど美しいとされると聞き、文化の違いであると理解しつつも、どこか寂しさを感じました。しかし今回、キリングフィールドやトゥールスレン虐殺博物館を訪れた際、収監されていた女性たちの写真の多くで、髪が肩より短く切られていることに気付きました。その光景に、言いようのない違和感を覚えました。このことと現在の美意識との関係を断定することはできませんが、歴史的経験が社会の価値観に何らかの影響を残している可能性について考えさせられました。本研修は環境を主題とするものでしたが、歴史や文化が人々の価値観や美意識に深く関わっていることを実感するとともに、自分の中にある価値観も問い直される経験となりました。

今後の抱負

本研修を通して、私は改めてカンボジアという国と、現地の人々の温かさに強く惹かれました。今後も、何らかの形で再びカンボジアを訪れるのではないかと思います。また、自身の将来について考え直す機会にもなりました。大学入学後の 1 年間、教員になることを目標としてきましたが、その進路について迷いも生じています。一方、今回の研修を通して、自分はやはり生物が好きであり、特に植物の成長を環境に配慮した形で促進する微生物学的研究に関心があることを再認識しました。環境負荷を抑えながら農業を支える技術や研究に携わることも、社会への貢献の一つの形であると感じています。しかし同時に、教員として人と関わる仕事をしたいという気持ちも依然として強いです。今回の農山村調査では、住民の方々に温かく迎えていただいた一方、文化や価値観の違いによる相互理解の難しさも実感しました。この経験を通じて、人と向き合い、対話を重ねながら理解を深めることの重要性を学びました。今後は、本研修で得た視点と経験を大切にしながら、自分がどのような形で社会と関わっていきたいのかを、より深く考えていきたいです。そして、環境問題や国際的な課題に対して、自分なりの方法で関わり続けたいです。

Message to my buddy

Dear Thea,

Thank you so much for being my buddy during this program. Because of you, my experience in Cambodia became truly meaningful. I will never forget our visit to Khmer Green Charcoal Co., Ltd. When you asked me, “Do you understand?” and explained the factory manager’s comments to me, I felt how kind and supportive you were. Thanks to your interpretation during the rural survey and environmental education activities, I was able to communicate with local people and learn so much. I also really enjoyed our conversations outside the program activities. I hope we can meet again someday, either in Cambodia or in Japan. I will always treasure the time we spent together.



研修成果発表会

環境教育と私の学び



丸山 彩希
獨協大学 経済学部 1 年

この研修で得たもの

今回の約 1 週間にわたるカンボジア研修は、私にとって単なる海外研修ではなく、自分自身の価値観や将来の方向性を見つめ直す大きな転機となりました。新しい環境に身を置き、現地の人々と直接関わる中で、知識だけでは得られない多くの学びと気付きを得ることができました。私はこれまで、大学のゼミで福島を訪れて高校生に環境教育の授業を行ったり、大学近隣の小学生を対象とした活動に参加したりしてきました。そのため、カンボジアの子どもたちが環境についてどの程度の知識や関心を持っているのかを、自分の目で確かめられることを楽しみにしていました。

実際にカンボジアに到着すると、生活の様子は日本とは大きく異なり、目にするものすべてが新鮮でした。開発途上国を訪れるのは今回が初めてで、街の様子を具体的に想像できていませんでしたが、予想以上に整備され、清潔であるという印象を受けました。ごみが落ちている場所もありましたが、清掃を行う地域住民の姿も多く、自分たちの暮らす場所を大切にしようとする意識が感じられました。

また、カンボジアの人々の朝の早さにも驚きました。プノンペンで訪れたモーニングマーケットでは、午前 6 時にもかかわらず既に多くの店が営業し、人々でにぎわっていました。眠い目をこすりながらホテルを出発した私も、活気ある街の雰囲気から大きなエネルギーをもらいました。

農山村調査では、特に漁業の方法が印象に残っています。湖周辺では、大型のリフトネットのような漁具を用いて漁が行われていました。ボートから釣りざおや網を使う姿を想像していた私にとって、その光景は強い印象を残しました。

聞き取り調査では、村人が森林の重要性を予想以上に理解していることにも驚かされました。私たちのグループは、地域住民が森林の多面的な役割について十分に理解していない可能性があるという仮説を立てていました。しかし、実際にインタビューを行うと、森林保全が日常生活と密接に結び付いていることを理解している回答が多く得られました。森林の仕組みそのものへの理解度までは測れなかったものの、基礎的な知識と意識があることが分かりました。そして何より、村人の皆さんが終始笑顔で丁寧に答えてくださったことが印象に残っています。

環境教育ワークショップも、本研修で最も楽しみにしていた活動の一つでした。実施前、カンボジアではごみの分別制度が十分に整っていないと知り、私たちが考えた活動が本当に意味のあるものになるのか不安を感じました。制度が整っていない状況で分別を教えることは、一方的な価値観の押し付けになってしまうのではないかと考えたからです。しかし、実際に活動を行うと、児童は

予想以上に真剣に、そして楽しそうに取り組んでくれました。分別ゲームにも積極的に参加し、最後に環境に対する自分の思いを紙にまとめている様子から、環境への関心は決して低くないと感じました。制度が整っていないことと、意識がないことは同じではないと気付かされた瞬間でした。この経験を通して、環境教育とは単に正解を教えることではなく、「なぜそれが必要なのか」を共に考える機会をつくることではないかと感じました。地域の生活背景や社会制度を無視した教育は定着しません。だからこそ、その土地の実情を理解し、現地の人々と対話しながら学びを共につくる姿勢が重要だと実感しました。限られた時間ではありましたが、私たちが考えた企画に笑顔で取り組む児童の姿は、今も忘れられません。あの時間は、私にとって環境教育の本質を改めて考える、かけがえのない経験となりました。

研修を終えての今後の抱負

今回の研修を通して、環境問題は単なる知識の有無だけで語れるものではなく、人々の生活様式、文化、価値観と深く結び付いていることを実感しました。現地での体験を通じて、環境教育とは情報を伝えるだけの行為ではなく、地域社会の文脈の中で初めて意味を持つ営みであると考えるようになりました。今後は、大学で取り組んでいる環境教育活動に、今回得た視点を生かしていきたいと考えています。特に、制度や生活背景を踏まえた教育の在り方を意識し、単なる知識の伝達ではなく、行動につながる学びを設計できるようになりたいと思います。また、国や文化の違いを越えて協力することの大切さも学びました。言語の壁があっても、互いに歩み寄ろうとする姿勢があれば協働できるという経験は、大きな自信になりました。将来は、他国の人々と連携しながら、地球規模の環境問題の解決に貢献する活動に積極的に関わりたいと考えています。本研修で得た学びを一時的な経験で終わらせず、自分の進路や行動に結び付けていきたいと思います。

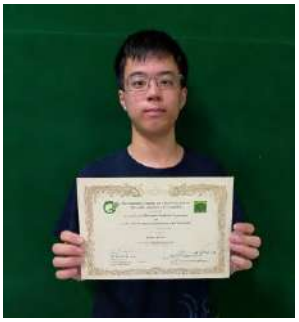
Message to my buddy

Thank you so much for all your support during our time in Cambodia. As a member of Group B, you were truly indispensable. Your Khmer interpretation during the rural survey and environmental education activities helped us enormously. I know it was not easy for any of us to communicate in languages that were not our mother tongues, but you always spoke up and brought great energy to the group. I truly appreciate that. I am so happy that I had the opportunity to meet you. Let’s stay in touch!



補植活動

地球と、そこに住む人々



向井 大歩
東京農業大学 生物産業学部 海洋水産学科 1 年

今回の研修は、私にとって初めての海外での活動でした。日本とは全く異なる環境の中で、さまざまなことに驚かされました。一方で、目にするものすべてが新鮮で、多くの学びを得ることもできました。ここでは、1 週間の研修を振り返りながら、現地で何を学び、環境保全に対する考え方がどのように変わったのかを述べます。

特に目を引いたのは、道端に落ちているごみの量でした。首都の舗装道路でも、道路脇に多くのペットボトルが転がっていました。聞き取り調査を行った湖周辺の農山村では、空き缶やプラスチック包装が各所に落ちていました。日本では、農山村部より都市部でポイ捨てが多いという印象を持っていましたが、今回訪れた地域では異なる状況が見られました。農山村部では、ごみ箱や収集の仕組みが十分に整っておらず、飲食や買物の後に生じたごみがそのまま捨てられている場所もありました。

小学校で活動を行うに当たり、カンボジアの廃棄物事情について調べる中で、訪問地域ではごみの分別が一般化していないことを知りました。可燃ごみ、不燃ごみ、プラスチックなどが一括して処分される場合も多いとのことです。廃棄物処理施設の不足も大きな課題です。ごみを収集するには車両と人員が必要であり、分別やリサイクルの仕組みも整備しなければなりません。カンボジアの歴史と現状を学ぶ中で、廃棄物管理を含む社会基盤には、なお多くの課題が残されていることを認識しました。

もう一つ、考えさせられたのは、現地の方々の森林保全に対する認識です。3 日目に実施した農山村での聞き取り調査では、干ばつや洪水を防ぐために森林を守る必要があるという回答が多く得られました。さらに興味深かったのは、多くの人が「自分たちが森林を利用しなければ、森林は回復する」と考えていたことです。

不要な伐採や焼畑を減らすことは、森林破壊の抑制につながります。しかし、劣化した森林を効果的に回復させるためには、自然回復を待つだけでなく、状況に応じて植林、保育、下草管理などを行う必要もあります。こうした森林管理の方法は、住民に十分に共有されていないように感じました。

森林管理の方法を理解するためには、専門的な知識や学習の機会が必要です。そのため、地域に適した管理方法を伝え、実践を支える人材がいなければ、森林の回復を進めることは難しいと考えます。

森林を守り、回復させるためには、教育活動が不可欠です。そして、その実施が容易ではないことも本研修を通じて学びました。カンボジア社会には、急速な社会変化に加え、約50年前のクメール・ルージュ政権下における知識人の大量虐殺など、歴史的出来事の影響も残っていると考えられます。知識や技術を次世代に伝える人材が不足してい

る地域では、教育体制を整えること自体が大きな課題となります。

環境保全は、現在の世界が共有する重要な課題です。しかし、それに取り組むためには、将来や世界に目を向けられるだけの生活上の余裕も必要です。十分な教育、安定した収入を得られる雇用、持続的に利用できるインフラなどが整って、初めて長期的な課題について考える余地が生まれます。先進国からの経済的支援だけでは、開発途上国が抱える問題を解決することはできないのだと強く認識しました。

今回の研修を通じて、私の中にあった森林保全のイメージは大きく変わりました。環境を守るためには、まず地域の人々の暮らしを安定させる必要があることを、現実感をもって学ぶことができました。この経験は、今後の私にとって大きな糧になると思います。

私が大学で学んでいるのは海洋分野ですが、海洋汚染も人間の活動によって生じます。その背景には、地域の人々の暮らしがあります。科学的に妥当な対策であっても、それが人々の生活をゆがめたり、損なったりするものであれば、対立を生み、より大きな問題へ発展する可能性があります。人々の暮らしと環境保全の双方をどのように実現するのかを考える視点を得られたという点で、今回の研修は非常に有意義でした。

今後、環境保全活動に参加する機会があれば、今回の研修で得た経験を生かしたいです。現地の方々との関わり方、調査に必要な準備、環境教育の在り方など、実に多くのことを学ぶことができました。初めての海外での学習活動が実り多いものとなったことを、うれしく思います。

For all participants

Thanks to everyone's support, I was able to complete this training. As this was my first time participating in an overseas program, I am sure there were many areas in which I lacked experience, but I am grateful for everything you taught me along the way. Although our time together was short, I am truly happy that I had the opportunity to work with all of you. I look forward to the day when we can work together again, somewhere in the world.

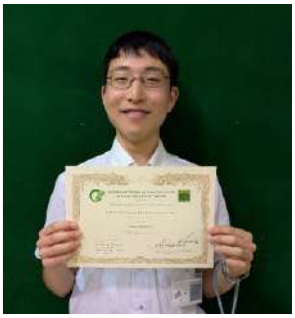


Chitheang Village における聞き取り調査



補植活動

学部 3 年生の自分ができたこと、学んだこと



二宮 育己
北海道大学 農学部 3 年

本稿について

本稿は、本研修を通じて学んだこと、できたこと・できなかったこと、学部 3 年生として感じたこと、そして感謝の気持ちを記録することを目的としています。数年後に読み返した際、カンボジア滞在中や渡航前の準備期間における活動の記憶が鮮明によみがえるよう、未来の自分への手紙を書くような気持ちでまとめました。

カンボジアについて思ったこと、教育について思ったこと

現地の人々には、真面目で素直な姿勢があるように感じました。一方、社会の価値観や慣習が意思決定に与える影響は大きく、歴史的・社会的背景を踏まえて物事を捉える必要もあると感じました。人々の誠実さは大きな力であり、適切な支援や政策が進められれば、着実な発展につながると考えます。

農山村調査では、村の人々が質の高い教育を重視していることに驚きました。特に高齢の方ほど教育の重要性を強く語り、経済成長や雇用、所得の向上よりも、まず教育環境が整ってほしいと願う声が聞かれました。私自身も、大学に入り世界を見るようになってから教育の大切さを実感したため、農山村の人々の意見に共感しました。ただし、教育とは、教室で行われる「勉強」だけではないと思います。本研修はその好例です。大学の単位や成績にはなりませんが、多くの経験を得ることができ、その背後には若い人材を育てようとする多くの大人の努力があります。運営に携わる方々からキャリアについて話を伺うことや、成果物を作成するためにチームで作業することなど、あらゆる経験が教育となり、私の血肉になるのだと思います。学校の成績やテストの点数だけでなく、さまざまな経験を糧として吸収し、成長していきたいです。

この国は厳しい歴史を経験してきましたが、現在は大きな可能性に満ちています。今回関わった現地の大学生も優秀であり、カンボジアの人々も若い世代の活躍に期待しているように感じました。私たちが成長し、それぞれの専門性や技能を身に付けたとき、いつか彼らと共に仕事をする日が来るのではないかと思います。その日の種となる貴重なつながりを、本研修で得たのだと感じています。

NGO 活動について学んだこと

地域に対して直接的な対策や行動を提供できることが、NGO の強みであると思います。また、中央政府の政策の恩恵が届きにくい人々を支援できることも、NGO の重要な役割であると感じました。経済発展を目指すカンボジアにおいて、私たちが訪れた農山村は、都市部と比べて開発や支援が十分に届いていないような印象を受けました。さらに、都市部の近代化に伴って進む森林減少に対して、植林や環境教育を地域レベルで実施できることも強みでしょう。一方、NGO 単

独で生み出せる影響には限界もあると感じました。カーボンクレジットなどの経済的なインセンティブを活用して行政の植林活動を促すことや、政府開発援助（ODA）による事業を企画することなど、国レベルでの積極的な働きかけと支援も必要です。渡航前から理解していたことではありますが、各セクターがそれぞれの強みを生かして連携することで、初めて国の持続的な発展を支えることができるのだと実感しました。また、NGO に関わる仕事も、自身のキャリアの選択肢として考えるようになりました。

グループ活動について

正直なところ、完璧な準備ができたとはいえません。しかし、グループ会議ではオンライン上の議事録を同時に作成し、それを画面共有することで共通認識を形成しやすくしました。また、集中する時間と楽しむ時間のメリハリを意識し、集中するときには一気に取り組むこと、言い訳をせず着手すること、活動の中で自分が取り組む意味や没頭する価値を見いだすことを心掛けました。さらに、ストレスによって活動に支障が出そうなときには、音楽を聴いて気持ちを整え、休息を優先するなどの工夫をしました。こうした点では、大学 1～2 年次の失敗を生かし、これまでのチームワークでの学びを十分に活用して臨めたと思います。うまくいかなかった部分は実力不足として受け止め、今後もリーダーシップを磨いていきたいです。

今後の抱負

4 年生になると研究が始まり、自分の専門分野をさらに深めていくことになります。本研修を通じて、開発途上国の農業分野で国際貢献をしたいという思いが一層強くなりました。今後は研究に取り組む中で、常に「この技術は、どのような形で現地の人々に貢献できるのか」という問いを持ち続けたいと考えています。そして卒業後は、研究を通じて得た知識を実践へと結び付けられる人材になりたいと思います。

同じグループで活動した皆さんへ

一緒に活動できて楽しかったです。時には強引なリーダーシップになってしまったことを反省しています。そのような中でも、数々の活動を共に乗り越えてくれて、本当にありがとうございました。学年が異なるため、意見を言いにくい場面もあったと思います。それでも、しっかりと意見を出し、私の説明が分かりにくいときには何度も丁寧に確認してくれました。その積み重ねが、4 人で団結して各活動に取り組み、協力し合える環境をつくることにつながったのだと思います。ほかの 3 人にとっても、実りあるグループ活動であったなら幸いです。

Message to my buddy

Thank you very much for your dedicated support and for actively participating in every activity. Thanks to your efforts during the rural survey, we were able to collect valuable information from residents who could not read or write. During the lessons at the primary school, I believe that your explanations in Khmer were what truly helped the children understand our message.

I would be very happy if you occasionally looked back at our letters and remembered us!



補植活動

出会いと気づきに満ちたカンボジア



大田 菜央
東京農業大学 地域環境科学部 森林総合科学科 3 年

この研修で得たもの

私はカンボジアに、壮大な自然が広がるという漠然としたイメージを抱いていました。しかし、実際に訪れると、都市部には美しく整備された広場があり、ナイトクルーズも行われるなど、想像以上に発展していました。一方、農山村部には凹凸の激しい道路も多く、地域間の差も見られました。自分の足で街を歩き、ごみのにおい、バイクが行き交う速度感、街のにぎわいなどを五感で捉えられたことに、大きな喜びを感じました。

オンラインでの事前研修までは、緊張や不安もありました。しかし、実際に会うと、皆さんは親しみやすく、温かい方々でした。日本人メンバーだけでも十人十色の背景を持ち、さらに 3 名のカンボジア人メンバーが加わったことで、多様な人々と関わることができました。直接会い、関わることで初めて分かることがあると実感し、多くの刺激を受け、心から尊敬できる仲間に出会いました。

私は普段、自分がどのようなときに幸せを感じるのかを考えることがあります。本研修を通じて、改めて幸せを実感しました。皆と笑い合うこと、おいしい食事を共にすること、人の笑顔や美しい空を見ること。幸せの形は人それぞれですが、小さく素朴なことで十分なのだと気付きました。そして、その小さな幸せに気付けること自体が幸せなのだと感じました。

研修で特に印象に残っているのは、小学校での環境教育と農山村調査です。当日は、準備した内容が伝わるのかという不安と緊張、そして楽しみが入り交じっていました。小学校に到着すると、バスの窓越しに子どもたちが笑顔で迎えてくれている姿が見え、驚くと同時に安心しました。

環境教育を通じて、学んだ内容を児童自身が表現する機会を設けることの重要性を学びました。私たちのグループは森林の重要性を伝えることはできたと感じていますが、「その後、どのような行動につなげるか」を子どもたち自身に考えてもらう段階までは、十分に実施できませんでした。他のグループはそこまで実践しており、将来を担う子どもたちに主体的に考えてもらうことの大切さを学びました。また、児童と共に植林活動も行いました。しかし、以前に植えられた苗木の生育状況は、必ずしも良好とはいえませんでした。土地条件や水やりの不足など、さまざまな要因が考えられます。このことから、植えることがゴールではなく、その後も継続的な管理、評価、支援が必要だと強く感じました。PDCA サイクルの重要性と、緑化活動の難しさを実感する機会となりました。

農山村調査では、当初、住民の方々に受け入れていただけるか不安でしたが、メンバーの Nea さんを中心に対話を重ねるうちに笑顔が見られ、安心感へと変わりました。クメール語の指差し会話帳を使い、子どもたちと会話できたこともうれしい経験でした。言葉

は、コミュニケーションを深める上で大きな力を持つと実感しました。湖をボートで巡った際には、私が抱いていた「圧倒的な自然が広がるカンボジア」を目にすることができました。調査では、住民の森林保全に対する意識を把握するため、環境、経済、生活に関する 10 枚のカードを重要度順に並べてもらい、その理由を尋ねました。当初は経済発展が優先されると予想していました。しかし実際には、森林保全が最も高く評価され、理由はさまざまであったものの、住民の方々が森林を大切に考えていることが分かりました。また、教育が 2 番目に重視され、教育が村の発展や環境保全につながるという意見が印象的でした。一方、十分な食料やインフラ整備を優先する声もあり、生活基盤の向上も依然として重要な課題だと感じました。これらの活動を通じて、海外で自分たちが計画した活動を実践するという貴重な経験を得ました。

研修を終えて今後の抱負

研修を終え、今後は自分の考えをより的確に伝えられるよう、英語力を向上させたいと強く思いました。一度で意図が伝わらないことも多かったと思いますが、理解しようと耳を傾けてくださった皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。そして何より、自然を守りたいという思いが一層強くなりました。私は将来、行政の立場から環境保全に携わる仕事に就きたいと考えています。今回の農山村調査を通じて、住民の中に森林を大切にしたいという意識があることが分かりました。その思いを具体的な取組につなげるには、行政が方向性を示し、多様な立場の声に耳を傾けながら合意形成を図ることが重要だと感じています。今後は、専門的な知識を高めるとともに、本研修で学んだコミュニケーションの大切さと傾聴する姿勢を生かし、環境と人の双方を大切にできる人材へと成長したいです。最後に、カンボジアで見つけたお気に入りの樹木について触れます。その樹木は、コウエンボクとオオバナサルスベリではないかと考えています。鮮やかな花を咲かせる姿は、今回の研修の思い出とともに、今も心に残っています。

私たちが安全かつ充実した研修を行えるよう計画し、支えてくださった皆様に、心より感謝申し上げます。今後も柔軟な姿勢を持ち、間違いを恐れず、楽しむことを忘れずに挑戦を続けたいと思います。将来は、募金などを通じて自らも支援する立場となり、この研修を次の世代へつなげたいと考えています。

Message to my buddy

Dear Nea,

Thank you for always giving your best in every activity. The environmental education activity and rural survey were successful thanks to your support. The time we spent together is truly irreplaceable to me. Please take care, and I hope we can meet again someday!

Dear Nino,

I may have relied on you too much as our leader, but thank you for supporting us from beginning to end. I look forward to your Instagram updates!

Dear Daiju,

Your sense of humor and way with words always made me laugh. Thank you for keeping our bus conversations lively. I hope you have the opportunity to experience many different ways of life in the future!

Dear Ichirin,

I love your cheerful personality and smile. I wonder how many songs I heard you humming during the training! Thank you for always making us laugh!

日差しと渇き



佐藤 大寿
東京農工大学 農学部 1 年

帰国から既に 5 日が経ちましたが、7 日間の研修を今も鮮明に思い出すことができます。書くことがないのではなく、むしろ 7 日間の情報量があまりにも多かったため、この報告に何を書くべきか決めかねています。そこで、研修で得たものを整理する意味も込めて、応募時に提出した課題書を見返してみることにしました。課題書では研修に対する抱負が問われ、私は「なぜ環境問題に取り組むのか、という問いに対して自分なりの答えを出す」と記しました。正直に言えば、研修中はこのことを思い出す余裕もありませんでしたが、研修を終えた今、改めて考えてみたいです。

この 7 日間で、私はさまざまな経験をしました。現地の大学生や農林水産局の職員の方々と交流し、カンボジアの歴史を学び、ココナッツ殻から炭を作る工場やゴムプランテーションを見学しました。また、農山村住民への聞き取り調査、小学生への環境教育、植林活動にも取り組みました。

中でも、現地の暑さとインフラの状況は特に印象に残っています。気温は 35 度を超え、連日の日差しは肌を刺すようでした。支給された水もすぐにぬるくなり、日本の夏を思い出しました。しかし、日本と大きく異なっていたのはインフラの整備状況です。首都プノンペン周辺の都市部では比較的整っていましたが、聞き取り調査を行った農山村では、電気や水道をはじめとするインフラが十分に普及していないように見受けられました。

このことは訪問前から知識として理解していましたが、実際に現地へ足を運び、歩いて回ることで、その大変さを身をもって感じました。そのような状況の中でも、私たちの調査に楽しそうについてきてくれた子どもたちが、私の見よう見まねのクメール語を理解しようとしてくれたとき、ふと「この村を大切にしたい」と感じました。少し話が飛びますが、「なぜ環境問題に取り組むのか」に対する答えは、この経験に通じるところがあるのではないかと思います。村の人々が支援を求めているかどうかとは別に、「村のために良いことをしたい」「助けたい」と思うのと同じように、環境問題に取り組む理由も、「この自然が好きだから」「この環境を守りたいから」で十分なのではないでしょうか。「このままのペースで資源を消費すれば将来世代が暮らせなくなるから」「経済的損失を防ぎたいから」といった理由も正しいです。しかし、多くの変化が起こり、何が正解か分かりにくくなりつつある現代において、少なくとも私にとっては、「自分がそうしたいから」という理由の方が納得できるように感じます。私が本研修で得たものは、このような考え方です。

今後は、今回の経験を将来の選択に生かすことを抱負としたいです。私は現在大学 1 年生であり、研究分野や職業など、さまざまな場面で選択を迫られることになります。研修前の私は、選択に非常に慎重で、選択し

なければならない将来を憂える部分がありました。しかし、研修を経て、「なぜ環境問題に取り組むのか」という問いに自分なりの答えを示せたことで、そのような不安が少なくなったように感じます。何をしたいかが具体的に決まったわけではありませんが、今の自分なら、自らの選択に自信を持って行動できると思います。そして、巡り巡って、今回出会った人々のためになる活動ができればよいと思います。ただ、怠けがちな私が何かを成し遂げるには、現在の環境は少し恵まれ過ぎているのかもしれません。だからこそ、炎天下の日に冷房の効いた部屋で涼むときも、カンボジアで感じた日差しと渇きを忘れてはならないと思いますし、忘れたくありません。

最後に、日本とカンボジアの研修員の皆さん、そして多くの貴重な経験を与えてくださったスタッフの皆様をはじめ、本研修に関わってくださったすべての方々に、心より感謝申し上げます。

Message to my buddy

How are you doing? I miss Cambodian food. Thank you for all your help during the training. I am glad that I was able to work with you as a member of Group A! I fell in love with Cambodia in just seven days, and I hope to visit again. If you ever come to Japan, please contact me. Take care until we meet again. I wish you all the best!



Chitheang Village での昼食



Chitheang Lake の視察





現地の豊かな自然と夕暮れの景色

環境教育と地域文化が生む持続可能な森林保全



佐藤 颯星
東京農業大学 農学部 農学科 2 年

この研修で得たもの

本研修は、「カンボジア国における持続可能な森林資源管理の推進―現地の人材育成と仕組みづくりを通して―」をテーマとして実施されました。森林資源の持続可能な利用は、環境保全と地域社会の発展を両立させる上で重要な課題です。本研修への参加を通じて、現地の状況と課題について理解を深めることができました。

まず、グループワークを進める中で、リーダーとしての自分の未熟さを痛感する場面が多くありました。短期間ではありましたが、オンラインで打合せを重ねながら、発表の準備と現地活動の計画を進めることは想像以上に難しく、振り返ると、より良い進め方があったのではないかという思いも残っています。

一方、他グループの取組からは多くの刺激を受けました。異なる大学や専攻の学生が、それぞれの視点から課題に向き合う姿勢には学ぶ点が多くありました。また、今泉常務理事、三原理事長をはじめとする環境修復保全機構のスタッフの方々の言葉や姿勢からも多くの示唆をいただき、国際的な視点で物事を捉える重要性について改めて考える機会となりました。

今回の活動の反省点の一つは、課題へのアプローチや仮説検証の過程で、本来のテーマである森林保全から焦点がやや外れてしまったことです。私たちのグループは最終的に「ごみの分別」をテーマとして取り組みましたが、カンボジアの現地状況を踏まえたとき、それが森林減少の抑制とどのように結び付くのかを明確に示すことは容易ではありませんでした。

また、現地の状況を知る中で、当初の想定とは異なる実態にも気付かされました。想定していた以上に取組が進んでいる側面もあり、まず現状を正確に理解することの重要性を実感しました。さらに、研修中に紹介された地域改善の事例から、政策の実施には財政面や優先順位など、さまざまな制約があることも理解しました。

特に印象に残ったのは、カンボジアの農山村部で見られた生活上の価値観です。現地では、仏教的な考え方が日常の行動にも表れており、「清潔な環境は良い運を導く」という考えを大切にしている方がいました。このような価値観が環境への意識や行動にも影響している可能性があり、環境問題を考える際には、文化や思想といった側面も重要であると感じました。

なお、執筆時点で私は米国に滞在していますが、ネバダ州の家庭では、ごみの分別がリサイクル可能物とそれ以外の二種類程度にとどまる場合も多く、日本ほど細かく分類されていないことに気付きました。

こうした違いから、環境問題への取組は、国や地域によって制度や実践の形が大きく異なることを実感しました。

研修を終えての今後の抱負

第一に、行動を起こすことです。大学では4月から研究室配属が始まるため、専攻するポストハーベスト分野について、より深く学びたいと考えています。食品ロスは世界共通の問題であり、その削減は廃棄物の減量だけでなく、農地拡大などによる森林への圧力を軽減することにもつながります。研修中に訪れたKhmer Green Charcoal Co., Ltd.のココナッツ殻を利用した練炭や、マーケットで販売されていたココナッツ殻の器は、資源を有効活用する興味深い事例でした。

また、来夏には JICA の短期派遣でボリビアを訪れ、現地農家への聞き取り調査を行う予定です。その際には、今回の研修で感じた「新しい考え方を他者に受け入れてもらうことの難しさ」を意識したいと考えています。地域の状況や価値観を理解した上で、どのように伝えるかを考えながら調査に取り組みたいと思います。

第二に、次世代へつなぐことです。私は普段、アルバイトで塾講師を務めるほか、一輪車競技の指導者として人に教える機会があります。分野は異なりますが、人に知識や技術を伝えることは、次世代を育成する上で重要な役割を担っていると考えています。現時点では、農業分野に関する知識はまだ十分とはいえませんが、大学での学びを通じて知識を深め、将来は自分自身も指導できる立場になれるよう努めていきたいと思います。

今回の研修は、環境問題を多角的に捉える視点を広げる機会となりました。今後は、この経験を自分の学びや活動に結び付け、具体的な行動へ移したいと考えています。

Message to my buddy

First of all, thank you for staying with us and seeing every activity through to the very end. During the rural survey and the environmental education activity at the primary school, you played an important role as a bridge between the local people and our team.

Although no one asked you to do so, you stayed up late preparing the questionnaires for the rural survey. That helped us enormously, and I truly appreciate it. I also have wonderful memories of our team meetings in the hotel lobby and of working together at a café to prepare the slides for our final presentation.

I have always felt that you are very good at connecting with people, both children and adults. Your friendliness and openness are truly impressive, and they stood out throughout the program.

I know that job hunting can be difficult, but I respect the way you have remained actively involved with the Institute of Environmental Rehabilitation and Conservation. Your commitment is admirable.

I am very grateful that this exchange between Cambodia and Japan gave me the opportunity to meet you. I hope that someday we will meet again somewhere in the world and work together for a better future.

I am a little sad that we did not have the chance to say a proper goodbye at the end, but I hope you are doing well and staying healthy.

Thank you for everything—អរគុណ!



ボウル（セントラルマーケット）

カンボジアで見つめ直した
異文化理解と国際協力のかたち



立野 美帆
北海道大学 大学院 農学院 修士 1 年

この研修で得たもの

本研修を通じて得たものの中で、最も大きな収穫は、「異文化理解と国際協力に対する自分自身の捉え方の変化」です。現地で得た具体的なデータや情報は、インターネットや文献を通じて調べることもできます。そのため本稿では、あえて抽象的な視点から、今回の経験によって生じた自身の内面や思考の変化について論じます。現地の雰囲気が写真からも伝われば幸いです。

これまで私は、異文化理解とは「みんな違って、みんな良い」という姿勢で、相手の文化をそのまま受け入れることだと考えていました。しかし、今回の経験を通じて、その考え方は、複雑な背景を深く考えずに自分を納得させるための態度であった可能性に気付きました。文化は単に「その国らしさ」として存在するのではなく、歴史、社会構造、生活の現実の中で形づくられています。また、文化的背景が、時に新たな課題を生み出している場合もあります。そのため、文化を表面的に受け入れるだけでなく、その背景や課題まで理解した上で、自分が「変える必要があるのではないか」と感じた点について、現地の人々がどのように考えているのかという認識の違いを丁寧に捉えることこそ、より積極的な異文化理解ではないかと考えるようになりました。

この視点の変化は、国際協力の在り方や国際問題への自身の関わり方を考える上でも、大きな示唆を与えました。国際協力は、先進国の発展モデルに追いつくことを目標として支援するものではなく、現地の人々の生活や価値観に基づき、その国が持つ良さや特徴を損なわない形で、自律的に社会を改善できるよう支えるものであるべきだと、本研修を通じて強く感じました。資金援助も重要ですが、それ以上に、人材育成や科学的知識の普及といった「ソフト面」の支援が不可欠です。外部が一方的に与えるのではなく、現地の人々と伴走する形で進めることが理想的だと考えるようになりました。

このことは、農山村調査の実践を通じて強く感じました。特に、現地の人々が持つ知識と生活実態との間に、大きなギャップが存在していることが印象的でした。グループでアンケート調査を実施したところ、多くの住民が森林の多面的機能の重要性を理解し、森林を守る必要性も認識していました。一方、「持続可能な森林利用」について尋ねると、「森林利用を全面的にやめる」「政府が管理すべき」といった回答が多く、利用と保全を両立させるという視点は十分に共有されていないことに衝撃を受けました。

その背景には、カンボジアにおける急速な開発と社会基盤整備とのアンバランスがあるのではないかと感じました。クメール・ルージュ政権の崩壊から約 50 年の間に、首都には高層ビルが立ち並び、キャッシュレス決済に対応したトゥクトゥクが走るなど、都市の目に

見える部分は急速に発展しています。一方、道路、信号、上下水道、教育などの社会基盤は、必ずしも同じ速度で整備されているとはいえず、読み書きが難しい人もいます。このような状況の中、農山村では、「明日を生きるために目の前の木を伐り、得られるだけの魚を捕る」という現実が存在していました。

この現実を前に、単に「過度な森林伐採は環境破壊につながるからやめるべきだ」と外部から訴えることの限界を感じました。環境問題を解決するには、まず人々の生活実態を理解し、その問題がなぜ起きているのかという根本原因を見つめる必要があります。そして、環境教育による知識の普及だけでなく、容易ではないものの、持続可能な利用を生活の中で実践できる仕組みを整えることが不可欠であると実感しました。「外部の理想」を押し付けるのではなく、現地の人々の生活や価値観に寄り添いながら共に考える姿勢の重要性を学ぶことができました。

今後の抱負

これまで私は、日本以外の世界情勢について深く知る機会が多くありませんでした。しかし本研修を通じて、インターネットや文献だけでは分からない現地の状況と人々の暮らしを、自分の目で見て肌で感じることができました。この経験は、環境保全の在り方と、その課題に自分がどのように関われるのかを考える大きなきっかけとなりました。

今後まず大切にしたいのは、カンボジアをはじめとする国際的な問題に、積極的かつ継続的に関心を持ち続けることです。現時点では、自分がどのような形で直接関われるのかは明確ではありません。また、将来、国際的な問題に直接関わる立場になるとは限りません。大きな行動を起こせなくても、世界の現状や各国の取組を主体的に「知る」ことを続けることが、国際社会とのつながりを保つ第一歩であると感じています。情報があふれる現代だからこそ、自ら情報を選び取り、当事者意識をもって関心を持ち続けたいです。

私は将来、森林を軸として、環境や地域社会に良い影響を与えられる分野で働くことを志しています。本研修では、環境保全の課題とその背景を、現地社会や人々の暮らしと結び付けて考える視点を得ました。特に、環境、社会、経済のいずれか一つだけに良い影響を与える取組は長続きせず、持続可能なものにはなりにくいことを強く実感しました。今回の経験で得た視点を大切にしながら、環境・社会・経済のすべてに価値を生み出す実践的な事業や仕組みづくりに貢献し、国際社会の持続可能な発展に寄与したいです。

Message to my buddy

Dear Nick,

Thank you so much for spending almost an entire week working with us. Because of you, this became a truly meaningful and memorable experience for me.

To be honest, I sometimes struggled to communicate in English at the beginning, and there were moments when I almost gave up trying to express myself. However, you were always patient, listened sincerely, and tried to understand me. That meant a great deal to me and encouraged me to keep trying to communicate.

I was also deeply inspired by the way you always thought carefully and continued searching for answers until the very end. Watching you made me want to challenge myself more.

Through this experience, you reminded me of the importance of having the courage to try and of continuing even when things are

difficult. I am truly grateful for that. I am so happy that you were my buddy. Thank you for everything, Nick. I will never forget the experience we shared. Until we meet again, take care and stay well!



カンボジアならではのゴムのプランテーション



Chitheang Lake の視察時に見た湖上の住居



補植活動



帰国してから恋しくなるカンボジアのご飯



Group B のメンバーたち

現地に行って初めて見えた現実



山本 薫奈
獨協大学 外語学部 3 年

今回の研修を通じて、私は森林保全や環境問題に関する知識だけでなく、現地の教育や生活の様子を実際に見ることで、多くの気付きと学びを得ました。これまで環境問題については、ニュースや授業を通して学ぶことが多く、どこか遠い問題のように感じていました。しかし現地を訪れ、人々の暮らしの中で環境問題がどのように関わっているかを自分の目で見ることで、より現実的で身近な課題として捉えることができました。

特に印象に残っているのは、小学校で環境教育を行った経験です。私たちは、ごみの分別について学んでもらうため、分別のミニゲームを取り入れた授業を実施しました。言語や文化の違いがある中で、子どもたちにうまく伝えられるか不安もありました。しかし、実際に授業を行うと、児童は積極的に参加し、楽しみながら分別に取り組んでいました。その姿から、子どもたちの高い理解力、学ぶ意欲、柔軟な発想に驚かされました。私たちは教える立場でしたが、実際には子どもたちから多くを学ばせてもらったと感じています。

また、学校の環境も強く印象に残っています。教室には机と椅子が整えられ、子どもたちは教室に入る前に必ず靴を脱いでいました。その理由は、教室を汚さないためとのことです。学校の外には砂地が広がり、靴や服が汚れやすい環境であることが分かりました。日本では外履きと室内履きを分けることが一般的ですが、そのための設備や環境を整えることが難しい地域もあるという現実を目の当たりにし、教育環境の違いについて深く考えさせられました。

さらに、授業体制にも日本との違いがありました。クメール語、社会、理科、算数は毎日行われ、英語は 2 週間に 1〜2 回程度であるとのことです。また、一人の教員がすべての教科を担当し、児童数に対して教員が不足しているため、午前と午後の二部制が採られています。このような状況を知り、日本では体育、音楽、美術など多様な授業を受けられる環境が整っていることの価値を改めて実感しました。学校は、学力を向上させるだけでなく、子どもたちが多様な経験を通じて成長する場でもあるのだと感じました。

農山村部の訪問では、ごみの分別に関するインタビューも行いました。ペットボトルを集めて売る家庭は一部に限られ、多くの家庭ではごみを自ら燃やして処理しているという現状を知りました。私はその方法に驚きましたが、ごみ収集の仕組みが整っていない地域では、それが現実的な選択肢となっていることも理解できました。環境問題は個人の意識だけで解決できるものではなく、社会の仕組みやインフラ整備と深く結び付いていることを実感しました。

この経験を一度きりの思い出にせず、今後の学びと行動につなげていきたいです。大学で環境問題や国際協力についてさらに学

びを深めるとともに、日常生活でも資源を大切に使うことを意識したいです。また、この経験を周囲に伝えることで、環境問題について考えるきっかけを広げていきたいです

Message to My Buddy

Although this program lasted only one week, thank you so much for supporting us wholeheartedly. I truly appreciate everything you did for us.

I no longer think of you only as my buddy; I feel that we became true friends who could share silly jokes and laugh together. You are such a funny and kind person. I was always impressed by how quickly you noticed when someone in our group was not feeling well or when something was wrong. You were always caring and thoughtful toward all of us.

Because of you, I felt comfortable and supported throughout the program. I am truly grateful that we were able to spend this special time together.

I hope we can meet again someday. Until then, please take care, and do not forget that you have a friend in Japan!



補植活動



補植活動後の集合写真

How International Cooperation Strengthens Environmental Action



NHEV Sreynich
Royal University of Agriculture,
Faculty of Agricultural Biosystems Engineering, Grade 1

Introduction

From 13 to 18 February, I participated in the International Green Volunteer Training, a program designed to promote forest conservation and sustainable development in Cambodia. I would like to express my sincere gratitude to NALAPO, ERECON and all donors and supporters for their invaluable assistance and dedication in organizing this program. Without their efforts, this meaningful training would not have been possible.

What I have learned

During the International Green Volunteer Training, held from 13 to 18 February, I learned many important lessons. I had the opportunity to communicate and work with trainees from another country, which helped me improve my teamwork and communication skills. We shared ideas, prepared presentation slides, discussed various topics, and made decisions together. Working with friends from different backgrounds taught me to understand different perspectives and respect other cultures.

I also learned more about forest conservation and its importance for sustainable development in Cambodia. The training encouraged me to think more deeply about how forests can be protected while local communities are supported. In addition, I learned how to plan a workshop, select a clear theme, formulate a hypothesis, and design a survey related to that theme. These activities strengthened my critical-thinking skills and increased my confidence in planning and organizing environmental projects.

Future Aspirations and Commitment to Environmental Sustainability

Following this training, I hope to continue participating in international programs and working with people from different countries. I want to develop in many ways, especially by improving my critical-thinking, communication, and teamwork skills. I also want to become more flexible, responsible, and confident when facing new challenges. This training encouraged me to step outside my comfort zone, seek new experiences, and take initiative rather than being afraid to begin something new.

In addition, I want to deepen my understanding of forest conservation and sustainable development in Cambodia and learn practical ways to protect forests while supporting local communities. I hope to apply what I learned by developing small projects, raising awareness, and encouraging others to care more about the environment. I also want to learn more about different cultures, perspectives, and working styles so that I can

collaborate more effectively in international settings. Overall, I hope this training will serve as the starting point for my personal growth and long-term commitment to environmental protection.

Message to my buddy

I would like to sincerely thank all the Japanese trainees for their kindness, teamwork, and positive attitude throughout the training. Working alongside you was an invaluable experience that enriched my understanding of forest conservation and cultural diversity. Despite our different backgrounds, we shared ideas, supported one another, and worked toward the common goal of protecting the environment. I hope we can maintain our friendship, and I look forward to future opportunities to collaborate and learn together.



Environmental education practice



Group photo. at Srae Sorm Thmey Primary School

Environmental Education and Tree Planting with Children



NUON Soknea
Royal University of Agriculture,
Faculty of Agricultural Biosystems Engineering, Grade 3

Overview

The International Green Volunteer Training program lasted eight days: four days in Phnom Penh, three days in Tboung Khmum Province, and one night in transit. Its main activities included estimating carbon stocks in trees, surveying residents' views on forest protection, and learning about environmental issues. The sites we visited were highly relevant to my field of study. Throughout the training, we also participated in a range of educational activities that addressed important environmental challenges.

Activities

•Tree Planting: We planted trees with pupils at Sraesorm Thymey Primary School and taught them how to plant and care for seedlings.

•Ecosystem Education: We taught the children about relationships within ecosystems, including human impacts on the environment and the interdependence of living and non-living components.

•Environmental Comparison: We demonstrated the benefits of trees by comparing water infiltration and soil stability in soil with and without vegetation.

•Soil Experiment: We taught pupils about soil characteristics by passing water through different soil types. They observed differences in water movement and retention, which are important for plant growth.

•Interactive Learning: We organized a leaf-collection game in the school grounds so that the children could observe the number and variety of tree species while learning in an enjoyable atmosphere.

Knowledge Gained

•Developed my English-language skills.

•Gained confidence to participate in future International Green Volunteer Training programs.

•Visited places that were new to me.

•Learned how waste can be recycled or reused to reduce environmental impacts.

•Learned about Japanese culture, careful preparation before beginning tasks, and punctuality.

•Deepened my knowledge of ecosystems.

•Learned more about the benefits that forests provide to people and communities.

•Gained practical experience and knowledge in data collection.

•Learned about the agricultural sector in Tboung Khmum Province, particularly industrial crops.

Commitment

After completing this training, I am committed to sharing the knowledge I gained with those around me and to participating in environmental training programs whenever possible. In particular, I will apply the

experience gained from the rural survey to understand challenges in my own community. I will also continue participating in tree-planting activities and sharing environmental knowledge with children and young people in my area, with the aim of nurturing a lasting appreciation of nature.

Message to My Buddies

First of all, I would like to thank NALAPO, ERECON and all my Japanese friends, especially the members of Group A—Nao, Nino, Ichirin, and Daiju. I was very happy to work with all of you.

The tree-planting, teaching, and games with the children are especially unforgettable memories. Thank you all for your hard work. Because of you, this training became one of the best experiences of my life. I hope we can meet again someday!



Field survey in Chitheang Village



Connection between Environment and Education on IGVT



PHOUNG Chomreoumnthea
Royal University of Agriculture,
Faculty of Agricultural Biosystems Engineering, Grade 3

Overview

The program activities in Cambodia lasted five days. The first and final days were spent at the Royal University of Agriculture, where we presented key ideas and reported on the activities conducted by each group. We spent the intervening three days in Tboung Khmum Province.

Activities

During the program, we participated in many activities, including visits to Khmer Green Charcoal Co., Ltd. and a rubber plantation; a rural survey in Chitheang Village and at Chitheang Lake; environmental education at Sraesorm Thymey Primary School; a visit to the Tboung Khmum Provincial Department of Agriculture, Forestry, and Fisheries; and observations of research and educational programs at UHST. My favorite activities were the rural survey and environmental education.

•Rural Survey:

We interviewed residents of Chitheang Village to understand their household waste-management practices and to share information about separating waste at home. This activity could help raise awareness of proper waste sorting and of ways to reuse materials—for example, by selling recyclable items, using organic waste as animal feed, or making compost for home gardens and crops.

•Environmental Education:

We taught children at Sraesorm Thymey Primary School about environmental protection. Our lesson introduced the 3Rs, which provide practical guidance for reducing environmental pollution: reduce the use of plastic and other disposable materials, reuse items as many times as possible, and recycle materials that can be processed into new products. After the lesson, most pupils appeared to understand these principles, and some said that they were already putting them into practice in their daily lives.

Knowledge Gained

After participating in this training course, I gained knowledge and experience in the following areas:

•Recycling agricultural waste into environmentally friendly charcoal briquettes.
•Estimating carbon stocks in trees.
•Waste separation and management.
•Japanese approaches to teamwork.
•Improving my language proficiency and developing deeper critical-thinking skills.

Commitment

After participating in this training course, I am committed to joining other environment-related programs whenever possible. I will also share the knowledge gained through this program with my family and others around me, with the aim of contributing to environmental

protection and finding useful applications for materials that were previously regarded as waste.

Conclusion

In conclusion, relatively few community members and pupils have received systematic education on how to sort waste by type. I hope that further environmental education programs will be offered, because informed participation by community members and young people is essential to protecting and conserving our shared environment

Message to my buddy

First of all, I would like to thank NALAPO, ERECON and all my Japanese friends, especially the members of Group B—Kana, Ryusei, and Mimi. I am very happy to have participated in this program.

This program was a special opportunity that allowed me to learn a great deal, particularly about environmental issues. I also improved my English and communication skills and learned so much from all of you. Finally, I would like to thank the donors, sponsors, and everyone who participated in the program. These activities are important because they encourage people and pupils in Cambodia to think more deeply about environmental protection. I hope that one day we will meet again!



Group photo after the training completion ceremony

外部評価者による所見

東京農業大学 地域環境科学部 生産環境工学科 教授
Prof. Dr. TOUCH Narong

日本では自然環境が比較的良好に保全されているため、その重要性を意識する機会は、必ずしも多くありません。

しかし、日本の学生が現地を訪れ、自らの目で森林減少の現状を見て、地域住民との交流を通じてその影響を肌で感じたことは、環境問題を身近な課題として捉える契機となりました。このような実体験は、環境保全に対する意識の変容を促し、将来、持続可能な社会の実現を担う人材の育成につながる点で高く評価できます。

また、本研修は森林保全にとどまらず、異文化理解を深めるという教育的意義も有しています。現地住民や学生との交流を通じて、持続可能な社会を実現するには、国際的な協力と相互理解が不可欠であることを学ぶ機会となりました。

さらに、日本とカンボジアの学生が共に活動し、意見交換を行ったことで、双方の学生にとって、グローバルな視点から環境課題を考える力を養う機会となりました。将来の国際協働を担う人材の育成にも、大きく貢献したものと評価できます。

（内容の英訳）

Japan’s natural environment is relatively well preserved; therefore, opportunities to consciously recognize its importance are not always abundant. By visiting Cambodia, observing the realities of forest loss firsthand, and interacting with local residents, however, the Japanese students came to understand environmental issues as challenges that directly affect people’s lives. Such experience can foster changes in attitudes toward environmental conservation and is highly valuable for developing future leaders who can contribute to a sustainable society. Furthermore, the program offered educational benefits beyond forest conservation by promoting intercultural understanding. Through exchanges with local residents and students, participants learned that international cooperation and mutual understanding are essential to achieving a sustainable society. Collaborative activities and discussions between Japanese and Cambodian students also provided both groups with opportunities to develop a global perspective on environmental challenges. The program therefore made a significant contribution to nurturing future professionals capable of international collaboration in addressing global environmental issues.

共催団体による評価と今後の展望

特定非営利活動法人 環境修復保全機構
2025 年度 緑の国際ボランティア研修（カンボジア国） 担当

2025 年度の研修プログラムは、大きなトラブルもなく、実りある成果を収め、無事に終了しました。

本研修の実施に当たり、昨年度に引き続き研修に随行してくださった公益社団法人国土緑化推進機構の今泉裕治常務理事、準備段階から丁寧なご指導を賜りました箕輪和香奈課長、主体的に現地活動に取り組んだ研修員の皆様をはじめ、すべての関係者に心より御礼申し上げます。日程が過密で負担が大きかったとの意見もありましたが、そのような状況においても、研修員が各自で工夫しながら活動に取り組み、学びや成長につなげる姿勢が見られました。特に今泉常務理事には、現地においても的確かつ有益な助言を通じて、研修全体を導いていただきました。

本研修では、「緑の募金」による助成を受けて緑化活動を実施した小学校の訪問、環境教育の実践、農山村地域における聞き取り調査など、現場に根差したプログラムを展開しました。成果発表会では、環境教育の手法や地域資源を活用した社会の仕組みについて、具体的で熱意ある提案が示されました。また、研修後のアンケートやレポートには、現地活動を通じて研修員が感じたことや、今後必要と考える行動について主体的に考察した意見が数多く記されていました。これらの成果から、本研修が実践的な学びの場として重要な役割を果たしたことがうかがえます。

一方、ESD（持続可能な開発のための教育）をさらに深化させるため、今後のプログラム設計に向けた課題も明らかになりました。今回の農山村調査およびワークショップでは、3 グループ中 2 グループが「ごみ問題（ごみの分別）」をテーマに取り上げ、現地の生活環境に根差した課題を的確に捉え、議論を深めました。しかし、議論が身近な事象の解決にとどまり、森林保全との関連を十分に示せなかった点は、今後の課題です。これらの成果と課題を踏まえ、今後は、本研修の根幹である森林保全への理解をさらに深めるとともに、カンボジア固有の課題に焦点を当てたプログラムの提供に努めます。

次回の研修では、事前学習の段階から、カンボジアの森林政策や地域社会が直面する固有の課題について理解を深める取組を強化する予定です。また、一般的な環境問題にとどまらず、歴史的背景、生態系、持続可能なコミュニティ林業の実態をより深く取り上げ、研修員が自ら問いを立て、主体的に探究できるカリキュラムを構築したいと考えています。

今後も、国土緑化推進機構の「緑の募金」によるご支援のもと、人材育成プログラムの質的向上と現地受入機関との連携強化を目指してまいります　。



The International Green Volunteer Training in Cambodia, February 2026.

This training program was conducted in the Kingdom of Cambodia with the aim of fostering future human resources for international reforestation cooperation, while promoting understanding of the importance of international reforestation efforts and the role played by the ‘Green Fund’.

This report is intended to widely disseminate the outcomes of the training, raise public awareness of international reforestation efforts, and serve as a reference for the implementation of future programs.

July, 2026



主催・発行　公益社団法人　国土緑化推進機構
共催・編集　特定非営利活動法人　環境修復保全機構

Published July 2026

ISSN 2760-8662

© 2026 The National Land Afforestation Promotion Organization / The Institute of Environmental Rehabilitation and Conservation
All rights reserved. ※本冊子の内容を無断で転載・複製することを禁じます。